別記様式第７号

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

１．申請者氏名	安藤　哲也
２．審査委員	主　査：（上越教育大学教授）林　　泰成 副主査：（鳴門教育大学教授）田村　隆宏 委　員：（上越教育大学教授）水落　芳明 委　員：（上越教育大学教授）加藤　哲文 委　員：（上越教育大学教授）五十嵐透子

３．論文題目

就学前の学びをつなぐ生活科学習指導の探究

―子どもの経験知の見取りに着目して―

４．審査結果の要旨

先端課題実践開発専攻　先端課題実践開発連合講座　安藤哲也　から申請のあった学位論文について，兵庫教育大学学位規則第１６条に基づき，下記のとおり審査を行った。

論文審査日時：令和３年２月１６日（火）　１３時４０分～１４時３０分
場　　所：上越教育大学人文棟2階　人209室（およびZoomによる参加）

１．学位論文の構成と概要

本論文は，全6章で構成されている。

序章では，問題の所在が明らかにされ，本研究の目的として，①文献調査に基づく理論的考察と事例研究を用いた実践的考察をとおして就学前の学びを生かした生活科学習指導の実相を明らかにすること，②その研究成果に基づいて，就学前の学びを生活科学習指導へとつなぐ実践的指針を提言すること，の2つが示されている。

第１章では，文献に基づき，本研究において幼児期の学びとしての「経験知」を理論的に検討している。とくに，教育哲学者デューイの「経験」の理論を基盤として，さまざまな論者の考えを検討し，本研究においては，経験知を「具体的な体験を通して得た「知」であり，周囲の環境に働きかけ（周囲の環境から働きかけを受け），それらの反応を受ける（それらに応じる）といった相互作用の過程や結果を通して得た，自分なりの思考や感覚，行動の様式」と定義している。

第２章では，子どもの経験知に着目して，4つの事例が取り上げられ，検討されている。1つめの事例では，生活科授業において幼稚園等での経験を起点とすることの意義が示されている。2つめの事例では，小学校教師が子どもの経験知を見取り支援することの意義が示されている。3つめの事例では，幼少の学びの連続性に着目することで小1担任の意識には子どもの見取りと支援，保育者との連携について新たな志向が生じることを明らかにしている。４つめの事例では，5歳児担任の見取りを援用することで幼少の学びの連続性を支え，気づきの質を高める生活科学習指導を実践しうるのだということを明らかにしている。

第３章では，前章での事例研究に基づき，①子どもにとって学びがつながるとは具体的にどうなることか，②子どもの学びをつなぐために小学校教師は子どもをどう見取り，かかわればよい

か，③小学校教師と保育者による見取りにはどのような違いがあるか，ということについて考察している。①については，経験知を幼児期に得たときと同様な状況で想起し再現したり適用したりすることが子どもにとっての学びのつながりであるということを示している。②については，幼稚園教育要領等の内容理解を基に幼児期の教育で得た経験知と，経験知を発揮する子どもの姿を想定しておき，自らの経験知を自覚できるような言葉がけを行うことによって，子どもは関連した自分の経験知を意識し意欲や自信を持つようになると期待できる，ということを示している。③については，小１担任と5歳児担任の見取りの背景には実践知の差異があり，指導方法に関する実践知と子ども理解に関する実践知の差異が双方の見取りにかかわりをもつということを明らかにしている。

第４章では，第１章での理論的な考察と，第２章，第３章での事例を基にした実践的な考察を基にして，就学前の学びをつなぐ生活科学習指導の在り方についての具体的な指針について検討し，提案をおこなっている。具体的には，たとえば，就学前の学びをつなぐために小学校教師が行うべき子ども理解は，一人一人の子どもの具体的な体験の履歴を踏まえ，そこでの学びを想定することまで含むため，保育実践記録の手法として一般化されつつあるエピソード記述による記録を共有することが重要になる，と示されている。また，子どもにとって学びがつながる学習指導を行うためには，小学校教師が「学びのつながり」について「関連づく」「繰り返す」「継続する」など，複数の視点で考えるとともに，子どもの経験知を認め，引き出す指導を行う必要がある，ということが明らかにされている。

終章では，第1章から第4章までの論考を，本研究の2つの目的に照らして，結論がまとめられている。また課題として，事例研究に基づくものであるため，その内容が限定的・断片的であるとのことも触れられている。

２．審査経過

本研究は，小学校低学年に設置されている教科「生活科」の学習指導に焦点を当て，「学びの連続性」という観点から，経験知としての就学前の学びを生活科に生かすその現状を事例研究によって明らかにしたうえで，その実践的指針を明らかにしようとするものである。

幼児教育と小学校教育の連携は，さまざまな報告書等でその重要性が示されているが，しかし，「遊びや生活を通して総合的に学んでいく幼児期の教育課程」と，「各教科等の学習内容を系統的に学ぶ児童期の教育課程」は接続が容易ではないという指摘もある。

本研究は，そうした困難な課題を，小学校の「生活科」の学習指導に，就学前教育の経験知を生かすというアイデアで連続的に捉えようとしている点で大変興味深く，評価できる。また，経験知そのものについても，デューイの理論に基づいて，古代ギリシャ思想における経験と思考を分離してとらえようとする考え方に批判的な立場を展開している点も，自己の依って立つ立場を明確に示しているという意味で，評価できる。

本研究は，小学校の生活科を対象にしているとはいえ，就学前の学びを生かそうとしている点で幼児教育研究としての一面もあり，学校種をまたいで取り組まれた実践研究である。また，ベースとして経験論的な立場に依拠して論が組み立てられている点は，この研究全体が，生活科に焦点を当てながらも，経験論的な立場から今後の学校教育実践の在り方を考察する手がかりを与えるものとして評価することができる。

３．審査結果

以上により，本審査委員会は安藤哲也の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し，全員一致で合格と判定した。